



千葉県東方沖でマグニチュード6.0の地震発生

7月7日20時すぎに、千葉県東方沖でM6.0の地震が発生し、1地点で震度5弱を観測しました。この地震は6月18日に大阪で発生した地震と規模はほぼ同じでしたが、被害地震とはなりませんでした。

これには2つの理由があります。1) 海域で発生したため、いわゆる都市直下型地震ではなかったこと。2) 地震発生の深さが50kmと深く、大阪の場合の10kmとは大きく異なっている事。特に2)の地震発生の深さの違いはそのまま地表(=人が住んでいる所)との距離が異なる事を意味します。深さ50kmと10kmではその差は40kmとなります。この40kmというのは水平距離ですと、たとえば東京都庁から40kmの円を描きますと、藤沢や八王子、桶川、千葉あたりとなります。つまりこれだけ遠い所で発生した地震という事になります。



大阪で言えば、大阪市役所から京都市役所までがおおよそ40kmの距離に相当します。都市直下型地震の場合、地震の規模(マグニチュード)より、その上の地盤がどうであるか(大阪は水の都であり、たとえば大阪駅の位置する梅田は“田を埋めた”場所なのです)、人口密度がどうであるか、そして建物の年代(古さ)がどうであるかという事に被害の状況は大きく依存するという事になります。大阪北部地震はその事を如実に証明した地震であったと思います。

また房総半島沖では、6月に入りスロースリップと呼ばれる現象が起きていましたが、スロースリップは深さ20km程度で発生している現象である事から、7日の地震(深さ50km)とは直接の関係は無いと考えられています。ただ房総半島沖での地震活動が活発化しているのは事実であり、十分な注意が今後とも必要であると思われます。

ここ数日の豪雨災害について

これまで、一般的には「地震は広域災害」、「集中豪雨や土砂崩れは局地災害」と考えられてきましたが、ここ数日の西日本を中心とした豪雨災害はとても局地的な被害とは言えない状況であると、認識せ



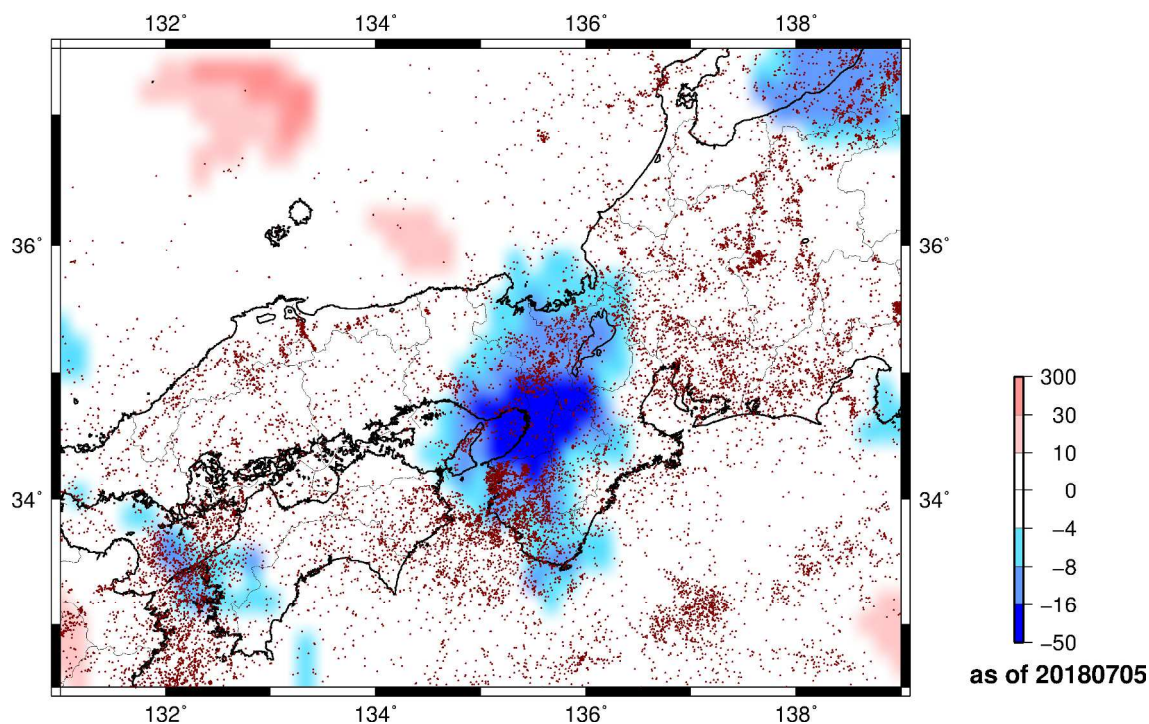
ざるを得ません。

確かにここ10-15年ほど、気象災害が大型化しているとの指摘があります。この原因としてやはり考えざるを得ないのが、“地球温暖化”の影響だと思います。コンピュータ・シミュレーションでは、温暖化が進むと台風の数が減るかわりに、超大型の台風が増える等の結果も公表されています。その他、異常高温、大雨、干ばつなど、気候の“振れ幅”が大きくなるというのが、共通した傾向となっています。

今回の広域における豪雨災害の対応は、将来の南海トラフ巨大地震に対する対応の難しさの一端を示していると思われます。同時多発の救援依頼、道路の寸断による被災地への到達不能、インフラの復旧の遅れなど、このような事をより真剣に考えるよいきっかけとしなければならないと思います。

大阪北部地震の続報

これまでの経験則で、地下天気図解析では「静穏化が終了してから地震が発生する可能性が高い」と述べてきました。近畿地方については、大阪北部地震が発生しても、まだ静穏化の異常が続いている事をお伝えしていますが、7月5日の時点でもまだ大きな静穏化が残っている事がわかりました。今後大阪を中心とした近畿圏で、静穏化が終了してからさらなる大地震が発生するというのが仮説の一つとなります。



7月5日時点の地下天気図。図中の小さな点は地震を表す。